

# 日本近現代文学作品における鳴門イメージの創出と変容

## 一名勝・冒険・大衆ロマン

笹尾 佳代

### 1. はじめに

鳴門海峡・渦潮は、日本近現代文学作品にどのように描き出されてきたのであろうか。本報告書では、文学作品に描き出された鳴門海峡・渦潮の特徴について、それらが発表された同時代状況との関わりを明らかにすることから考察してみたい。

鳴門をめぐる文学作品の多くは、既に『鳴門市史別巻 鳴門に関する文芸作品集』（鳴門市、1971. 10）（以下、『市史別巻』）に収録されている。今回行った追加調査を通して改めて気づかされたのは、この『市史別巻』編纂時に行われた調査の綿密さである。しかし一方で、『市史別巻』は、作者の生年順に、その創作を紹介するという編集方針をとっているため、鳴門に関する作品が多く発表された時期や時代における類型、その変化などは見えにくい。

そこで本報告では、『市史別巻』に収録された作品を軸に、追加調査で見つけた物語を適宜補いながら、その時々の鳴門イメージの類型に注目してみたい。鳴門海峡・渦潮が物語内でどのような像を結んでいるのかに注目するとともに、そうしたイメージの創出や変容の背後にあった事象について明らかにしたい。

### 2. 至難と精神修養の物語

本報告を通してたどる鳴門イメージをキーワードとして示すならば、名勝、冒険、大衆ロマンである。中でも特に、近代以降の物語ならではの事象としてあげられるのは、冒険と大衆ロマンであるだろう。次に順に示していきたい。

まず注目したいのは、少年向けの冒険・修養物語に描き出された渦潮の描写である。少年読者を意識した物語が登場し始めるのは明治30年頃であるが、こうした物語は、少年にあるべき姿を提示する、教化の機能を担ったものであった。その中で鳴門海峡は、少年たちの至難と修養の場として描き出されている。

右手遙に見ゆる鳴門の関に白く高く沸々として泡立ち渦巻きける潮が、太平洋に押出す狂瀾！ 怒濤！ 巨浪！ 我は瞬もせで唯其巨浪を見守つて、一心に仏の護念を仰いだ。（中略）

命は無事に、撫養に上陸した時、我は独り泣いた。自分の弱いのに泣いた。多少修

養したと思つたのに、之ばかりのことで恐るるとは何故であるか。あゝ千百の議論もだめである。多年の学問もだめである。議論以上、学問以上、どんなことがあつても動かぬ地盤を得ねばならぬと決心した。

築川生「鳴門を越ゆる時」(『精神界』1901(明治34).6)

渦潮を超えるという恐怖が「修養」の未熟さを自覚させ、「動かぬ地盤」を得ようという決心に結びつくという展開である。この頃の少年向け読み物の中には、鳴門の渦潮を体験し、その至難を乗り越えた後に変化が訪れるという類型が認められる。

もしも鳴門がむかしの人の云ふ如く、恐ろしい大蛇でも棲つて居る処だとすると、我々の命はまことに風前の灯火とでも云ふ可きでせう。然しながら私どもは鳴門と云ふものに対して、たゞ一概にしかも無意味に恐れを抱くものではありません。何故なればわれわれは胆力もあり、思慮もあり、殊に経験のある船長を持って居ります。われわれは深くこの有力な船長を頼みにして居るのであります。(中略)

船長の声で「鳴門に懸かりますぞ、渦巻きが見えましたぞ」と怒鳴るのが聞こえました。此の声はさながら「敵見えた、用意せよ」との号令のやうにも聞こえたので、直ぐ様被て居た上衣を脱ぎ捨て、靴を脱ぎ、写生帳と双眼鏡とを奪い取る様にして部屋を飛び出し、上看板へと登つて参りました。(中略) この外まだ沢山御話したいこともあります、余り長くもなりますし、殊に此鳴門辺の事は、無暗に画などに描いては成らぬ事になつて居りますから、是れ丈けにして筆を止めます。

倉田白羊「実地冒険 鳴門の乗切」(『少年』1907(明治40).1)

「鳴門に懸かりますぞ、渦巻きが見えましたぞ」という声が、「敵見えた、用意せよ」との号令のやうにも聞こえた」とあるように、渦潮を乗り切ることは、戦いに臨むような、緊迫した冒険として描き出されている。

これらの冒険・修養の物語における渦潮は、必ず少年が経験するものであり、彼らに試練をもたらし、精神を鍛えるものとなっている。なぜ、戦いや少年たちの試練・修養というイメージと接続されるのか。こうした物語の背景には、鳴門が要塞地として整備されたこととの関連を窺うことができる。

1893(明治26)年から建設の始まった鳴門要塞は、日露戦争を迎える1900年頃に完成し、1903年には由良要塞に組み入れられた。要塞地において少年たちが鍛えられるという話型には、ともに国を守る強い存在であるべきというイメージの連鎖を認めることが

できる。

### 3. 国語教科書の中の鳴門

鳴門が勇猛なイメージとして、子どもたちに伝えられようとしていたことは、教科書に掲載されていた詩と、その教授内容からも明らかである。文部省が1923（大正12）年8月に刊行した『尋常小学国語読本卷十一卷十二卷編纂趣意書・尋常小学国語書キ方手本第六学年用編纂趣意書』（国定教科書共同販売所）には、「鳴門」と題された詩の『尋常小学国語読本 第十二卷』への収録決定が記されている。対象学年は尋常小学校6年である。作者名は記されていないが、ジャンルは「文学的教材」とされている「鳴門」は次のような詩であった。

一

阿波と淡路のはざまの海は、  
此処ぞ名に負ふ鳴門の潮路。  
八重の高潮かちどき揚げて、  
海の誇のあるところ。

二

山もとゞろに引潮たぎり、  
たぎる引潮あら渦を巻き、  
巻いて流れて流れて巻いて、  
空にとびだつ、潮けむり。

三

裸島より渦潮見れば、  
胸も波だち眼もくらむ。  
船頭勇まし、此の潮筋を  
落し漕ぎゆく、木の葉舟。

全3連から成る詩である。「文学的教材」というカテゴリーが、当時用いられはじめたばかりであったためか、教授内容に関する様々な書籍—現在の学習指導書のような位置づけのもの—が刊行されている。これらからは、この詩がどのように教えられてようとしていたのかを知ることができるのだが、その典型は次のような内容である。

有名な鳴門の壮観を歌ったもの、之を暗誦することによつて、その壮観を目のあた

り想像せしめ、その勇敢な男性的気分に海国男子の血を沸かしめたいと思ふ。

(中略)

よく読誦させて詩全体から来る感じ—勇壮なまたは豪壮な男性的気分を感得させるやうにする。

秋田喜三郎『読本全課 発展的読本の実際』(明治図書、1926.6)

「高潮」に「かちどき」を重ね合わせた表現などを中心に、「男子」の「勇壮」さをかきたてることが目指されている。その他の図書におも、同質の指導案が収録されているが(1)、こうした指導書の中でも、この地が要塞であることに注意が向けられている。やはりここには、勇壮な渦潮、強い男子、強い国、というイメージの接続が認められるだろう。つまり「鳴門」のイメージは、少年たちの勇猛さ、勇敢さを教化するものとして利用されているのである。

この詩は、確認できた範囲では、1923(大正12)年に編まれた国定教科書に収録され、1931(昭和6)年の改訂版にも引き継がれているため、戦前のメジャーな国語教材であったことは確かなようだ。同巻に治められた地方に関する文章は「奈良」と「鎌倉」であった。

#### 4. 旅先の渦潮

鳴門海峡・渦潮が名勝地として知られたのは古くからのことであるが、その地が限られた時間の中で訪問する「観光地」となったこともまた、近代ならではの事態である。

鳴門の中の動きとしては、1908(明治41)年に鳴門公園と公園道路が整備され、同時期に鳴門の遊覧案内グループである鳴門保勝会が誕生した(2)。その後、『鉄道院沿線遊覧地案内』(鉄道院運輸部、1909(明治42))などような、鉄道会社が刊行したガイドブックに鳴門の項目が掲載されるようになる(3)。鉄道網の整備、一定収入を得た中間層の登場などによって旅が娯楽として一般化され始めるのだが、この頃描かれた紀行文からも、旅の大衆化を感じることができる。以下のものを見てみよう。

鳴門はやはり、徳島から撫養に出て、そこで乗合の汽船に乗る方が好いね。それはね、淡路の福良の方からも舟は出せるけれども、本当の潮の吞吐する壮観は、撫養の方からでなければ好く見えないからね。

ちょっと考えると、福良に行く方が便利のやうな気がするけれども、実はそうでもないよ。洲本から福良まで行く間だって五六里はあるからね。それよりは大阪の

築港から徳島行の汽船に乗れば、四時間で徳島に着く。徳島といふところも、俗地だけれども、一度は見て置いてもいいところだからね。例の城山にも登って見ても好きさー。(中略)

鳴門かえ？それは流石に天下の大観だよ。潮の加減で、はっきり見えない時もあるそうだが、僕が行った時には、ずっと一線を成して白く泡立ってあるのが手にとるやうに見えたよ。ちょっと億劫だから、人は滅多に出かけて行かないやうだけれども、好いところだね。是非一度は行ってみなければならぬところだね。但しあそこでは写真は撮れないよ。すべて要塞地帯だから……。

田山花袋「鳴門」(『京阪一日の行楽』1923(T12)2、博文館)

この文章の書き手である田山花袋は自然主義の作家として、明治末から文壇の中心で活躍していた。「あるがまま」を描くという自然主義思潮に基づいた文学実践は、小説の創作のみならず、各地をめぐるその地の姿をいわば写生するという紀行文にも及んだ。投稿雑誌である『文章世界』にも関わっていた花袋は、作家になるための習作として紀行文を書くことを推奨し、その投稿を促してもいた。

問答形式をとっているこの紀行文の特徴は、風景を描写するのではなく、実際にどのように訪れるのかということが話題となっていることにある。鳴門が訪れる場として想定され、観光ガイドの性質を持つものであることがわかる。そのため、この頃の観光事情が窺えて興味深い(4)。

旅の中で目にした渦潮を描いた興味深い作品としてここに紹介したいのは、与謝野鉄幹・晶子夫妻の歌である。1931(昭和6)年に、短歌結社である浅香社の井上一と、『明星』を創刊した新誌社の同人であった松永周二のもとを訪れるため徳島に来た鉄幹・晶子は、その後、鳴門に足を伸ばし、10月28日に一泊している。この滞在時に、鉄幹は34首、晶子は30首の歌を残している。まず鉄幹の歌を、いくつか見てみたい。

青き潮カプリの海に似るを見て秋の鳴門を船より渡る  
わが前に鳴門の海を白くして天の川ほど潮のかたぶく  
秋の雲宵の鳴門に行き来して刹那に変わる瀬の色と月  
午前二時がらすの外を白くして鳴門の潮に月ひとり乗る

鉄幹のまなざしは、鳴門の海をイタリアの南部のカプリ海の風景と重ねている。1911(明治44)年にフランスに渡り、ヨーロッパ各地を周遊した鉄幹ならではの感覚がここにある。

また「刹那に変わる瀬の色と月」という表現にも明らかなように、激しく潮が流れる時間、夕刻、月夜というように、刻々と表情を変える光景を捉えていることがわかる。こうした特徴は、晶子の歌にも認めることができる。

大鳴門潮を囁めるすさびゆゑ真白くなりし阿波の海かな  
 午後二時の鳴門の潮のおもてにはしら浪騒ぎ淡路の青し  
 午後二時の男の鳴門潮みちし月夜のもとのをんなの鳴門  
 玉蟲のもしむらがりてあるならば海の月夜の波に似なまし  
 山と水空も鳴門のあけぼのは藍むらさきの外のこと無し  
 風さむし福祿丸の撫養に著き車に移り阿波いでんとす

到着して最初に眺めた白波立つ鳴門海峡を、晶子は「男の鳴門」と表した。当時流通していた『尋常小学国語読本』や少年向け冒険譚の影響を、ここに認めることは可能であろう。それに対して、潮の時間を外れた月夜を「をんなの鳴門」と表現していることから、表情を変える風景に惹かれている様が窺えよう。さらに晶子の歌には、「あけぼの」の時間、去りゆく時が表されているため、午後に着いて、翌朝には撫養を去るという、短い時間の滞在であったことがわかる。

二人の訪問の7年前に書かれた先の花袋の文章には、「ちょっと億劫だから、人は滅多に出かけて行かない」場所とされていた鳴門に、鉄幹・晶子はわずかな滞在時間しか無いにも拘わらず訪れた。交通網の整備によって移動が容易になったことは確かであるが、加えて注目したいのは、この頃の鳴門の知名度の向上である。

1927（昭和2）年4月9日の『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』紙上には、「日本新八景」という投票企画の告知記事が掲載された。読者投稿によって、「山岳」「溪谷」「海岸」「河川」「平原」「瀑布」「湖沼」「温泉」の8つの分野の名所を決めようという企画である。こうした企画そのものが、旅行の大衆化を示すものであるだろう。

**「日本新八景」の選定**  
**選定八景** 山岳 溪谷 瀑布 温泉  
 湖沼 河川 海岸 平原

**各第一勝を募る**

「日本新八景」の投票と選定方法

一、日本新八景（山岳、九、四、四、四、四、四、四、四）の選定は、読者の投票により第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八の各第一勝を募る。

二、投票は、投票用紙に記入し、投票箱に入れ、投票する。

三、投票用紙は、投票箱に入れ、投票する。

四、投票用紙は、投票箱に入れ、投票する。

五、投票用紙は、投票箱に入れ、投票する。

六、投票用紙は、投票箱に入れ、投票する。

七、投票用紙は、投票箱に入れ、投票する。

八、投票用紙は、投票箱に入れ、投票する。

（この投票の方法、選定の方法は、投票箱に入れ、投票する。）

主催 東京日日新聞社  
 後援 大阪毎日新聞社  
 鐵道省

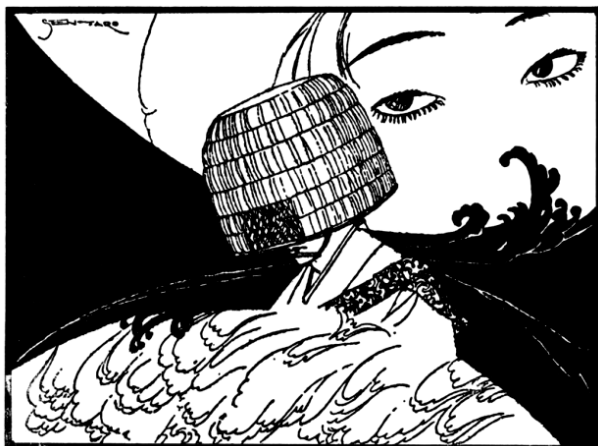
結果、「日本百景」が選定されるのだが、「海岸」編24カ所の中の一つに鳴門は選ばれ

ている。「海岸」編第一位の名所は、室戸岬であった。鳴門の知名度の向上に、教科書掲載詩の影響があったことは間違いない。しかし、鳴門が人気の地となった背後には、この時特有のさらなる要因があったと考えることができる。

## 5. 大衆ロマンの地

大正から昭和に移り変わる頃、鳴門イメージのターニングポイントを築いた文学作品が登場する。吉川英治「鳴門秘帖」である。「鳴門秘帖」は、1926（大正15）年8月11日から翌年10月14日まで、全345回に渡って『大阪毎日新聞』夕刊に連載された。中里介山『大菩薩峠』、白井喬二『富士に立つ影』と並んで、「大衆文学」というジャンルを形作ったという評価を受けるほど、影響力を持った作品である。ジャンル成立期の「大衆小説」は、いわゆる「髻物」のことを意味し、現代通俗小説は含まれない。そのため、これらの物語はすべて時代小説である。「鳴門秘帖」は、連載当時から人気を博し、人々は争って読んだと伝えられている。物語の内容を少し紹介しておこう。

時代は江戸中期、阿波藩に倒幕の陰謀があることを知った幕府の隠密・甲賀世阿弥は、潜入するが捕らえられ、剣山の獄に閉じ込められてしまう。主人公は、世阿弥を助け出そうとする仲間の隠密、虚無僧姿の法月弦之丞である。阿波藩の陰謀に迫ることと、世阿弥の娘であるお千絵と弦之丞の恋愛が主軸といってよい。タイトルの「鳴門秘帖」とは、世阿弥が剣山の獄の中で阿波藩の陰謀を書き綴った血書のことである。連載時の挿絵を描いた岩田専太郎も人気挿絵画家となり、強く人々の関心を引きつけた。



『大阪毎日新聞』

岩田専太郎挿絵（1926）

吉川英治はこの物語の創作について、次のように回想している。

それを僕に書かせたのは阿部真之助氏で、その大毎にはまだ千葉亀雄氏がいた時分で

すよ。けれど、社から伝言が来たとき、僕は驚いて、たしか断ったと思いますよ。(中略)夏でしたがねちょうど、日頃よく僕のうちへ遊びに来る木彫家の伊上凡骨が、隣の部屋で、昼寝していたんです。そいつが、あとでむっくり起きて、

『断るやつがあるもんか、絶好のチャンスだよ、書けよ、書けよ』  
とつばを飛ばしてさかんにケシかけてくれたのを覚えています。

(中略)

次に、あれのヒントですが、種をあかすと、司馬江漢(江戸中期の洋画家)の随筆「春波楼筆記」があれのタネ本です。

有朋堂文庫に入っていますね、その中に活字にして約十五、六行の一章がある。あれなんですよ。「鳴門秘帖」のエキスは。

吉川英治「鳴門秘帖の頃」(『文芸春秋』1957(S32) .11)

創作を奨励したという伊上凡骨とは、徳島出身の木版画彫師である。伊上との交流が、吉川に関心を阿波に向かわせた要因の一つであったことは想像に難くない。さらに、江戸中期の洋画家、司馬江漢の随筆「春波楼筆記」がもとになったことが明らかにされている。この「春波楼筆記」の内容は、熱海に行った司馬が蟄居を申し渡されているはずの蜂須賀重喜に出会い、暴君として謹慎をうけているはずだが暴君には見えない、と不思議に思うというものである。吉川は、なぜ蜂須賀重喜が30代で蟄居を命じられたのかを調査し、そこに政治的事情があったことを知った上で、幕府転覆の首謀者であるというストーリーを構想したという。

この物語の中で、陰謀うごめく地という阿波藩のイメージを作り出す効果的な要素が、「鳴門海峡」の描写であった。越えることが困難な関である鳴門海峡の描写は、容易に近寄ることができない場所としての阿波、秘密をかかえるのにふさわしい場所としてのイメージを創出している。「上方の巻」「江戸の巻」「木曾の巻」「船路の巻」「剣山の巻」「鳴門の巻」という構成であるが、「鳴門の巻」の描写を見てみよう。

意外な敵が横からひとつ殖えたため、周馬はかえって、そのまに小半町ほど逃げ越していた。しきりと道は登りになる。と思うと——轟ッ——とすさまじい潮の渦鳴り！  
崖松をすかして下をのぞくと真っ白だ。乱岩に散る波の銀屑である。そして白い無数の渦潮、或いは青黒い渦である。そこの岬からひと跨ぎに見える淡路の鳴門崎までの間十五間、飛鳥、裸島の岩から岩を拾ってゆけば、歩いても渡れそうだが、そうはゆかない。(中略)ヒュッと何か投げたかと思うと、松にひとすじの縄を廻して、その結



び目を送るが早いか、スルスルと断崖を迂って行く――。

そこを降りれば岬の根に、手ごろな舟が幾つもあった。鳴門若布を採る舟である。周馬はヒラリとそれに乗って、大胆にも渦巻く狂浪の中へ突いて出た。有名な大鳴門！おそろしい渦の海峡！そこへなんたる無謀だろうと思われたが、実は彼、この渦潮の海峡を難なくわたる秘密の瀬を知っていた。

どうして？ といえは。

最初にそれへ気がついたのが三位卿で、ここの天険に軍船の配置をする場合のため、克明に鳴門一帯を測量した時、水陣図のおぼえ書に、その渦路の秘密も書き加えておいた。

まだ書きかけであった鳴門水陣の一帖は、その後、かれが剣山で落し、甲賀世阿弥の血汐とぎらん草の汁に染まって、転々、今では周馬のふところの裡にある。

「潮の渦鳴り」のすさまじさととも、描写されているのは「十五間」という鳴門海峡の狭さである。物語喚起力として重要なのは、その狭さであるだろう。「飛島、裸島の岩から岩を拾ってゆけば、歩いても渡れそうだが、そうはゆかない」とあるように届きそうで届かないこと、見ることができるのに容易に渡ることができないからこそ、阿波は興味を引きつけるとともに、秘密を抱えた土地というイメージの中にあると考えられる。

ここで、秘帖を持って逃げる周馬とは、法月弦之丞と同じ隠密でありながら、対極的に、陰謀を持つ人物として描かれている。追っ手から逃れようと周馬は「鳴門若布を採る舟」に乗って、「渦の海峡」へ出て行くのだが、「無謀」とされるこの行動は、世阿弥が手に入れた「渦潮の海峡を難なくわたる秘密の瀬」を記した「水神図」の存在によって支えられている。つまり、鳴門海峡をどう攻略するかということもまた「秘帖」の内実となっているのだが、鳴門海峡が「解明されてはいけない場所」であったことは、発表当時も同様であった。

先にも述べた通り、観光地として見いだされたことによって、鳴門に関する文章は、数を増していた。例えば紀行文作家として著名な遅塚麗水「鳴門の記」(『露分衣』文禄堂、1908)や、旅行案内月刊雑誌として1924(大正13)年4月された『旅』の鳴門の記事など(5)、有名無名の書き手によってこの地の様子は伝えられている。しかしいずれの文章も、要塞地であるためにこの地の詳細は伝えていない。教科書の指導書類にも「場所が要塞地帯である為、世間にその實際を写した写真も絵画も見ることの出来ないのは止むを得ないことで、先づ此の地に行つて目撃して、その光景の壮絶、快絶よく此の詩の要所のあるところを了解するより外はない」と記述されるように(6)、詳細は秘められた土地

であった。

知名度が上がりながらも、「謎」のままに置かれるべき場所。「鳴門秘帖」は、こうした鳴門のパラドキシカルなイメージをうまく取り入れながら、大衆ロマンを投影する場として描き出していたのである。そして、「鳴門秘帖」の大人気が、鳴門の知名度を上げ、作家を含めた多くの人びとの訪問意欲をかき立てたことは、容易に想像されるだろう。

## 6. 「鳴門秘帖」のインパクト

大人気を博した「鳴門秘帖」が、長くインパクトを持ち続けたことは、例えば繰り返された映画化にも明らかである。最初の映画は、まだ連載途中であった1926年から27年にかけて、日活、マキノ映画、東亜キネマの三社によって制作されている。その後、1949（昭和24）年に『甲賀屋敷』と題して、大映が戦後最初に映画化したのを皮切りに、1954年には東映が、1957年、1961年には大映が続編として映画化している(7)。



1957年 大映



1961年 東映

さらに、映像化と平行して、類似した物語展開や場のイメージを持つ歴史小説が登場していた。例えば、中澤丞夫『鳴門恋笠』（『徳島新聞』1950.9.3～1952.5.2）の、鳴門海峡で刺客と戦う場面、富田常雄『鳴門太平記』（『週刊サンケイ』1960.7.18～1962.10.29）の、瀬戸の海中に眠る平家の財宝のありかを記した「秘図」があるという設定、さらに時代は下がるが、白石一郎『鳴門血風記』（徳間書店、1988）の、鳴門（海）と祖谷（山間）の振幅を描くという特徴には、「鳴門秘帖」のイメージが引き継がれている。

こうした現象は、映画界でも同様に起きていた。映画『鳴門秘帖』の大ヒットを受け

て、映画の商標として「鳴門」が価値を持ったことは、『鳴門の妖気』（1956）、『鳴門飛脚』（1958）、『鳴門の花嫁』（1959）などという、「鳴門」の名前を冠した映画が次々に発表されていたことからわかるだろう。時代劇であるこれらの映画は、「鳴門秘帖」が創出したイメージに参入するものであった。

## 7. おわりに

以上見てきたように、本報告書では、近代ならではの事例として、要塞地であることによるイメージの連鎖、観光事業との関わり、大衆文学というジャンル成立期の大ヒット作品を取り上げ、文学作品における鳴門イメージの創出と変容について検討した。

観光地であるとともに、「謎」として残されるべき要塞地鳴門。そのイメージが物語的に昇華された時、何かが隠された場所、陰謀や秘密がうごめく場所という鳴門イメージは創出されていた。このイメージは、「鳴門秘帖」の人気と共に、様々に派生し、補強されていったのである。そしてそれは、近年の物語にまで引き継がれていると考えられるのではないだろうか。

近年の鳴門をめぐる物語には、高木彬光『霧の罟』（カッパ・ノベルズ、1968）、島田一男『黒い渦潮』（春陽文庫、1985）、西村京太郎「阿波鳴門殺人事件」（『別冊小説宝石』1990. 秋号、のち『十津川警部の逆襲』1990）などを挙げることができる。これらの作品に共通する特徴は、そのジャンルにあるだろう。鳴門公園での殺人事件や、鳴門海峡での事件など、サスペンスや事件簿といったこれらの物語は、「何かが起きそうな場所」という、「鳴門秘帖」によってかたどられた鳴門イメージを引き継ぐものといってよいだろう。それは、数多く誕生してきた鳴門を舞台とするテレビ・ドラマからも感じられる。大衆の関心に訴え、物語的想像力を喚起する鳴門イメージは今日にも通じている。生み出された物語の水脈は、さらに広がっているだろう。

## 注

- (1) 塚本清『学習指導を中心としたる読方教育の実際』（公文館、1923. 11）、若松教育研究会国語研究部著『最新問題法に立脚したる 国語読本の深研究（六年用）』（森六営業所出版部、1925. 10）など。その他、唱歌として節がつけられ、舞踊として踊ることも奨励されていたことが、小山緑葉『学校劇の実際』（篠山書房、1928. 2）からわかる。
- (2) 『鳴門案内者』（鳴門保勝会、1922）。序に「明治41年4月に鳴門を公園および公園道路を完成し、同時に本会が生まれたのであります」とある。

- (3) その他のものに、鉄道省編『日本案内記 中国四国編』（博文館、1934）など。
- (4) 花袋のこの文章は、教科書の指導書という性質を持つ、井上武士『尋常小学唱歌の解説と其取扱〔尋六〕』（明治図書、1937.4）の中にも収録されており、補助教材として教室で紹介される可能性があるものであったことがわかる。
- (5) 「旅行地案内 下萌えの頃の旅は何處へ 鳴門觀潮」『旅』1932.3、「グラフセクション 鳴門の渦巻」『旅』1933.9、「鳴門觀湖と阿波盆踊」『旅』1933.12、小林善治「最近踏査記事 鳴門の潮鳴り」『旅』1938.11、など。
- (6) 秋田喜三郎『読本全課 発展的読本の実際』（明治図書、1926.6）
- (7) 「鳴門秘帖」映画化作品一覧
- 『鳴門秘帖』（1926 - 27年、日活、マキノ映画、東亜キネマ制作）
- 『甲賀屋敷』（1949年、大映。衣笠貞之助演出。長谷川一夫主演）
- 『鳴門秘帖』（1954年、東映。前・後篇。渡辺邦男監督。市川右太衛門主演）
- 『鳴門秘帖』（1957年、大映。衣笠貞之助監督。長谷川一夫、市川雷蔵主演）
- 『鳴門秘帖』、『鳴門秘帖 完結篇』（1961年、東映。内出好吉監督。鶴田浩二主演）

## 参考文献

- 秋田喜三郎 1926 『読本全課 発展的読本の実際』 明治図書
- 井上武士 1937 『尋常小学唱歌の解説と其取扱〔尋六〕』 明治図書
- 倉田白羊 1907 「実地冒険 鳴門の乗切」『少年』明治40.1
- 小林善治 1938 「最近踏査記事 鳴門の潮鳴り」『旅』1938.11
- 小山緑葉 1928 『学校劇の実際』 篠山書房
- 島田一男 1985 『黒い渦潮』 春陽文庫
- 白石一郎 1988 『鳴門血風記』 徳間書店
- 高木彬光 1968 『霧の罌』 カッパ・ノベルズ
- 田山花袋 1923 「鳴門」『京阪一日の行楽』 博文館
- 築川生 1901 「鳴門を越ゆる時」『精神界』1901.6
- 遅塚麗水 1908 「鳴門の記」『露分衣』 文禄堂
- 塚本清 1923 『学習指導を中心としたる読方教育の実際』 公文館
- 鉄道院運輸部 1909 『鉄道院沿線遊覧地案内』
- 鉄道省 1934 『日本案内記 中国四国編』 博文館
- 富田常雄 1960 「鳴門太平記」『週刊サンケイ』1960.7.18～1962.10.29
- 中澤丞夫 1950 「鳴門恋笠」『徳島新聞』1950.9.3～1952.5.2

- 鳴門保勝会 1922 『鳴門案内者』
- 鳴門市 1971 『鳴門市史別巻 鳴門に関する文芸作品集』
- 鳴門市 1982 『鳴門市史本編中巻』
- 西村京太郎 1990 「阿波鳴門殺人事件」『別冊小説宝石』1990秋号
- 文部省 1923 『尋常小学国語読本巻十一巻十二巻編纂趣意書・尋常小学国語書キ方手  
本第六学年用編纂趣意書』 国定教科書共同販売所
- 文部省 1923 『尋常小学国語読本 第十二巻』
- 吉川英治 1926 「鳴門秘帖」『大阪毎日新聞』 1926. 8. 11～1927. 10. 14
- 吉川英治 1957 「鳴門秘帖の頃」『文芸春秋』1957. 11
- 若松教育研究会国語研究部 1925 『最新問題法に立脚したる 国語読本の深研究（六  
年用）』 森六営業所出版部
- 無署名 1927 「「日本新八景」の選定」『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』1927. 4. 9、  
朝刊
- 無署名 1923 「旅行地案内 下萌えの頃の旅は何處へ 鳴門觀潮」『旅』1932. 3
- 無署名 1933 「グラフセクション 鳴門の渦巻」『旅』1933. 9

(神戸女学院大学)